
12星座の皆様

梶彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12星座の皆様

【著者名】

杜彦

N6903H

【あらすじ】

どこにでもあるような町、平穏な町。その町の名は88星座町。
と、いつても88星座全てが出てくるわけではなく、その中で
ポピュラーな12人の星座達が送るほのぼのギャグ風味な恋愛あり、
友情ありな日常コメディ（を垣詰しているお話です）

0話　ー登場人物ー

穏やかで平和な町、どこにでもあるような町。

現代版の桃源郷といえる町。

「こは、88星座町。

88人の名前を持つ星座と名前をもつ星星、約多分（誇張）千人が暮らす町。

この話は、その中のポピュラーな12人の日常的な物語です。

0話　12星座、全員集合

「と、いつことで。なんかいきなり物語を始めるにはやっこしいと
いつことで人物紹介から始まるそうです。

司会は12人の中で主要キャラになるであろうわたくし、蟹座の
蟹カイが進行させて頂きます」

まるで主要首脳国会議でも開くのではないかと思われる長い机の
周りには11人が着席しており、その一角に少女がマイクを持って
立っていた。

どちらかというと少年的な顔立ちをしており、男と間違われるこ
ともしばしば。そのため髪の毛は伸ばしきっているため髪型は整つ
てはいないがそんなんでも似合つ端麗な容姿。

華奢で細い肢体を持っているが、女として色気がないといふこと
がコンプレックス気味。

「まず紹介を始める前に私から自己紹介をさせていただきます。
先ほど言つたとおり名前は蟹カイと申します。16歳、職業はブログ

ラマー兼学生です。象徴カラーは銀。^{シンボル}この色はわかりやすいように
髪色を示しています。好きな数字は「2番」。趣味は家具集めで好
きな音楽は外国の歌です。

- ・・はい、こんな感じで次、牡羊座お願いします。
- 名前。年齢・職業。象徴カラー（髪の色）、好きな数字と趣味。
好きな音楽を言つて下さい。あとの説明は私がします

長々しい説明が終わり、指名されたヘッドホン青年、牡羊座が立ち上がる。

「名前は羊一。^{よういち} 19歳、取材記者。象徴カラーは赤で、趣味は園芸。
好きな数字は「9」。好きな音楽は国家と軍歌」
「・・・国家と軍歌つて・・今時の若者のクセに」

ぱつりと蟹^{カイ}は咳き、早速補足に入る。

「行動派で負けず嫌い。弱者を庇い親切な性格。どこか短気なところもあるが積極的。・・まあ彼はこの話では単なる短気ボケという扱いになります。

次、牡牛座

指名されたのは和服の知的長髪男性。見た感じからすでにやんわりとしたオーラがある。

「志牛、25歳でデザイナーです。象徴カラーは緑。好きな数字は「6」で趣味は音楽鑑賞。好きな音楽は弦楽曲ですかね」「12人の中では最長年でありまとめ役。名前からして中国人に思えますけど違います」

備考をつけたし、説明に入る。

「温厚でのほほんとした人です。意思家堅固であり忍耐力がある性質が在ります。

・・仲裁担当ですが切れると怖いです。

次、双子座

次に指名されたのは蟹^{カイ}と同い年ぐらいの少年。赤い洒落た眼鏡をかけていて、少量だが長い髪をまとめて結つてある髪型。

「双汰^{そうた}、16歳。現役通訳者。象徴カラーはライトグレー。好きな数字は「5」！趣味はパズルで好きな音楽はR & a m p ; B！」「とにかく元気な子です」

とつてつけたような一言を発し、説明に入る。

「好奇心旺盛で臨機応変、機知縦横で、筆舌ともに多角的な知性の持ち主。でも少し優柔不断。

・・・現代っ子のいじられツッ 「//担当です」

「え・・いじられ？」

「・・・・・・・」

「蟹^{カイ}・・なんで俺の目みてくんないの？」

「さあ、次いきましょう・獅子座の方ー」

なんとか話しを変えて逸らす蟹^{カイ}。

そんな蟹に助け舟を出すように獅子座が立ち上がる。

左眼下にある泣きぼくろがチャームポイントで、端整な容姿をした男性だ。

「獅貴^{しき}、24歳職業俳優。象徴カラーは金で好きな数字はもち一一番！趣味はドラマ鑑賞・・で、好きな音楽はミュージカルかな」

「ちやーらい・・・

ぼそ、と辛辣な台詞を吐いて（以下略）。

「田立ちたがり屋で派手好き。度量が大きく懐が大きい親分肌な性格。

この話の中では外見とは裏腹に結構真面目なツッコミ担当」

「なんか照れるな」

「でも孤独が嫌いな寂しがり屋さん。まだ一人で泣くタイプ」

「おい！」

「はい、次乙女座」

こんどはしっかりと無視して続ける司会者。

立ち上がったのは優しい微笑をたたえる女性。艶やかしい美とはまた少し違った美しさ放っている。

「乙妻、20歳職業マネージャー。象徴カラーはダークイエロー。
好きな数字は「5」で好きな音楽は宗教音楽です。趣味は読書」
「獅貴のベテランマネージャーです」

補足をつけたし（以下略）。

「中途半端は嫌いな完璧主義者な人です。几帳面で俗物は見下しますが精神はガラスのように脆い可愛い人です。

話の中では姉御って感じでも在り女性の味方ですな。

次・・・・・天秤座」

次に立ち上がった少年は黙つていれば優雅な雰囲気をもつた美少年ともいえる少年。

「天。18歳見習い美容師。象徴カラーは紺色。好きな数字は「6」で趣味は油絵とか描くこと。好きな音楽はピアノ曲」「外ヅラがいい人です」

本人には聞こえないようになんて呟き（以下略）。

「冷静で人情味がある人です。一方で飽き性でもあり現実主義者。誰にでも好かれる性格をしてますが一方で腹黒な部分もあります」

「ひつ」

卷之三

「…あんたがいるもオレみると悲鳴上げるよな」「つ、次いきましょう。蠍座」

次に指名されたのは長身でタートルネックを着用している端麗な容姿の男性。

「蠍王、22歳精神科医師。象徴カラーは暗赤色。好きな数字は「0」。好きな音楽は明るい曲ならなんでもいいかな?趣味はピ「だああああああああああああああ！」放送禁止用語！！やめろ、蠍座の方に謝れ！」

「蠍座つてもともと「ひこう」の星座だよ?」

心を落ちつかせ、司会者は説明に入る。

「秘密主義でお世辞や作り笑いなどはしない性格。洞察力が鋭い。感情のセーブが苦手なため執念深いし執着が激しい人です。話では

主要キャラに入りますね。ボケで

「執念深いってなんか根暗な性格だなあ」

「まあ合つてゐるからいいでしょ」

蟹カイがそのままいと、蠍王は一回考へて「そうだね」と笑う。それに、蟹は本能的に危険を感じ、あとずさつた。だが素早く逞しい腕が腰元に回され、引き寄せられる。

「裏切つたら許さないから」

真つ黒な笑顔を向けられ、色々と危機を感じた蟹カイは青褪めながら叫んだ。

「次！【副音声：助けてください】射手座！」
「え？ やだよ、オレが殺され」
「射手座！【副音声：潰すぞ？】
「・・はい」

蠍王に殺されるよりまた違った恐怖を感じ射手座が立ち上がった。
「ちらりも長身で、髪は少し短め。

「『おひと』、22歳、職業作家。象徴カラーは紫。好きな数字は「3」、
好きな音楽は吹奏曲。趣味は旅行
「助かった・・今度プリン奢る」

蠍王から逃げられた蟹カイは謝礼条件を伝え、説明に入る。

「束縛が嫌いで何事も自由でいたいタイプ。大胆不敵でありながら用心深く神経質な性格もある。・・・まあこの話ではボケ〇ヽツツ
ツ ノミの両立キャラ

「次、山羊座」

司会者が目を向けたところには、紺色のネームリーフォードがついて

いる外套に身を包んだ子供。目元は包帯で覆つてあり。左目が見えるか見えないかのため容姿はわかりにくく性別不明。ただツツコムとしたら「なんでヤギなのにネコ!!! フード?」だ。

「キッド。13・弁護士。シンボル・黒。ナンバー「8」。ミュー
ジック、崇厳曲。マイハビ、陶器作り」

「マイハビ、とは私の趣味ということです」

解説をした後（以下略）。

「12人の中では一番我慢強く孤独を何とも思わない心の強い子です。興味をもてばとことん追求するタイプ。・・・まあ彼はボケともツツコミともいえません。ただの謎キャラです。

次、水瓶座

指名されではっとした男性は本を置いて立ち上がる。12人の中では一番背が高く、異質な雰囲気がある。

「みなき水祁。みなかき23歳職業小説家・・・象徴カラーハズは灰色。好きな数字

は「4」。趣味は天文学や写真関連のこと。好きな音楽はロック、

ジャズ

「意外」

「そうか？」

水祁にひとまず領きを返し（以下略）。

「博愛主義で規制の価値観による、偏見を嫌悪する性質がある。名譽欲が希薄で鋭い觀察眼と、流暢な弁舌力を持つている。水瓶座は自由気ままな樂天的な性格ですが水祁は天然ボケです。蠍座との絡みが多いので主要キャラになるかも

最後、12人目。魚座

締めというだけあって、蟹もほつと息をついている。

呼ばれた魚座の少女は後頭部に大きなリボンがついており、一つ結び。12人の中では最少年だ。

『氷魚^{ひお}10歳。占い師。シンボルカラーすみれ色。好きな数字「7」。趣味はうみをみると。好きな音楽は・・・「ブルース」』

自由長に書かれた直筆に蟹はマイクを持ったまま硬直した。

「ひーちゃん」

「う?」

「ブルース好きなんだ」

「ぐり。

頷く動作すらも可愛らしい。

「誰だよー。こんな子に育てちやつたのー。」

「俺だけど?」

蠍王が拳手。

「ああ、納得いきますね。だってキッド君だって蠍王さんに育てられましたからね」

微笑をたたえる志牛。

「そりゃああんなのに育てられたら変なふうになるわ

興味なさげな獅貴。

「いいじゃないですか。可愛いんですから」

ポジティブな乙妻。

「氷魚、マイフレンズー」

彼女はわたしの仲間ですと囁ひキッド。

「お、キッドが変な主張してゐる。羊一、お前の仲間だぞ
どいか挑発する天。^{そら}」

「お前の方が変人だろ。なあ、双汰つ」

巻き込む羊一。

「ええー・・どつけどつけどつけだよ」

巻き添えを食う双汰。

「あれ? 水祁サン?」

傍観者だった四郎。

「寝る。少ししたら起こしてくれ

相変わらずマイペースな水祁。

こんな形で12人の物語が繰り広げられていく

。

「大丈夫かな・・・」

司会者、早くも不安。

後日談　IN 牡羊座 獅子座 射手座

「獅貴い、飲みにいかねえ？会議みたいな終わつたし」「んー、でも羊一今19だろ？だからオレンジジュースな」「獅貴つてこいつどころは眞面目だよねえ」「弓壱が自由すぎんだって」「義務教育過ぎたんだぜ？いいだろ？」
「・・・羊一、お前稀に危険な匂いがするな」「ああ、わかるよ。なんかヤのつく職業の若頭的な」「・・・」「・・・」
『・・・（まさか）』

0話　ー登場人物ー（後書き）

12星座というのをメインとして書いていきたいと思います。
早いペースでその日のうちに連続か次の日に。遅いときは毎更新となります；

星座の性格などにいたつての苦情は受け付けませんが、心が海のように広い方は次回もよろしくお願ひいたします^；

1話 蟹座 魚座 蟻座の巻き

今日も晴天恵まれた88星座町。

ぐーたら寝ているものもいれば学校に通う者も在り。早朝から仕事に励むものも在り。

そしてこの人は。

「お・・おなか痛い・・・」

1話 腹痛と共に

銀髪の伸びきった長めの髪を乱し、蟹はしんだいの上で膝を縮こまらせ、腹を押えていた。

額にはじつと脂汗が浮き出て、顔色は悪く、青白いといつても過言ではなかった。

そんな時、がちゃりとドアノブが回される音と共にじげ茶色の扉が開く。

「蟹 カイ ?そろそろ起きなきゃ学校遅れ・・・・・」

そういうながら仮にも乙女の部屋に入ってきたのは蠍王。

暗い赤色の頭髪をした白衣姿の男は、網戸を越えてやってきた風にふわりと長めの髪をなびかせながら硬直していた。

「…………か、かつ、み。おなか痛い…………」

苦痛から逃れたいためか、蟹はもがき、呻きながら蠍王の服の裾を掴む。

うん・・わかつた・・。それよりまづちよつといい?」

卷之三

襲っていいかな？」

「病人相手になにいつてんだよお前は！！！！！」

腹痛など忘れて真顔でそう言つてきた蠍王に顔を真つ赤にしながら蟹は叫んだ。

そう言うと蠍王はちえーと子供のように頬を膨らませながらも病人である少女を労るように毛布を掛け直し、頭を撫でた。

「痛み止めもrajioで貰ふから」とつぶやくお腹温めところで？氷魚置いとくか？」

じこから出したのか小柄なすみれ色の髪色の少女、氷魚を側にたたせる。

任せろ

そして、彼女のスケッチブックには、力強くそう書かれていた。
それを見て蟹は自然と笑みを灯し、蠍王も笑みを残して部屋から
出て行つた。

「面倒を増やして『ごめん。ひーちゃんにも、蠍王にも』
『大丈夫。かつみにとつて薬をもらつてくることは自分の趣味でも

あるし』

紅茶の入ったティーカップの取つ手を持ちながら少女は優雅にスケッヂブックを見せる。

「趣味？なんで趣味なんだ？・・・それよりそのティーセットとス『一ーンはどこから？！』

『かつみの「貰う」は「強奪」って意味だから。あいつの辞書に「交渉」という単語は載つていらないんだよ』

最後の質問は無視して氷魚はさうさうと字を綴る。

『それよつづれ』のが来た』

『つざいの？』

『ねつじやまあ～』

ばあん！

魚座の神秘的な潜在能力（？）が見事に当たり、金色の髪を靡かせた長身男が入ってくる。

『獅貴さん・・？』

『よ。風の噂でなんか具合悪いって聞いてな』

『（情報早いなこいつ）・・・仕事は？』

きりきりと痛むお腹をおさえながらも、獅貴を仰ぎ見る。

獅貴は顎を撫で、「仕事？」と笑う。

「もちろん抜けてきたに決まつ」

「逃がすわけないでしちつ？」の野郎

獅貴の言葉を遮ったのは般若のような笑みを浮かべている乙妻。
それを見て、「ゲツ」と獅貴は顔を青くさせた。

獅貴は売れっ子の俳優。無論彼にはマネージャーという強固な壁
が存在している。

「さ、帰りますよ。・・蟹さん、お体をお大事に。お見舞いとして
果物の詰め合わせです」

さつ、と山盛りになつた赤い果実と笑顔を残して乙妻は部屋を出
て行った。獅貴の首には繩がきつく巻かれており、今にも死にそう。

「・・何しに来たんだろつか、奴は」

2人が去つた後、蟹はぼつと呟いた。

『まあ林檎食べようよ。剥いて上げるから』

さつと氷魚は包丁をとりだし、すつと慣れたような手つきで刃を
赤い果実 林檎の皮へ沈ませる。

「ひーちゃん林檎の皮むけるんだ。初めて知つたよ・・凄いね」

『いや』

ふるふると氷魚は首を振る。

『包丁なんか人生で一回ももつたことないから今が初挑戦』

そう書いた直後、包丁が小さな手にグサッと刺さる。

「うあああああああああああああああああああああああああああ

ああああ……ひ、ひ　　ひや・・・…「

だらだらと流血状態の小さな手を見て混乱する蟹。とにかく止血しなければと手をぎゅっと握った瞬間。

「ぶつしゃああああああ…！」

尋常ではない赤黒い血が噴出した。

「何で？！おかしそうだろ！人間の体の構造として…！」

『ひおは人間じやないよ。神様だよ』

「なんか血文字で変なこと書いてるし…神様なら自分の血ぐりこ止めろよ」

『我に己の体を束縛する権利など…もはや…無い』

「何馬鹿なこと…ちやつてんの！」の子…！」

血は自分の顔にも返り血のよつに降りかかっており、鉄鎧のよつな臭いが鼻孔を刺激した。

「ただいま。くすねでき…・・・・・」

「か、蠍王…・・・…」

血だらけの惨状を見て絶句している蠍王に説明をしようと蟹が口を開口させたが、その前に蠍王が声を発する。

「何？ひーちゃん生理でもきたの？なら今日はお赤飯だね」「…」の状況でよくそんなこと言えるな…あともうこつた発言は控えろ…」

「え～・・・。これがないと俺のキャラが成り立たないんだけど」

「そういう事情は出すな！」

キリキリ・・キリキリキリ。

お腹が痛くて、小さく呻いた蟹は、はつとした。

(二)の痛み・・・腹痛じゃない・・・)

「あはははははははははーつていうかひーちやんおもしろすがーーめ
つちや血こ出でるじーあは、ふはっ・・はせ、げほつ」

最終的にむせる大の大人。

『ツボつたみたいだな。でもその前にこの傷どうにかしてよ現役医
者野郎』

冷静に指摘する氷魚だが、まずその前に子供が大出血をしている
のを田の前にして爆笑している田の前の男の異様な性質を突っ込め。

「無理だよ、俺精神科だもん」

ともかく彼を医者と見てる少女の儂い提案はその一言により一蹴
されてしまふが、氷魚はめげない。

『気合でなんとかしら』

「はいはい。じゃあ・・・うつへ・・・あ、悪化しちゃった」

『ぶつちやけ痛い。・・・?・・意識が・・霞んで・・』

『ああ〜〜〜やっぱいね』

蟹は自分の気も知らずボケた会話を繰り広げていく2人をみて、ついに叫んだ。

「お前等のせいでストレス溜まりまくつてるだろ？」「…………あとすぐに病院行ってこい！」

絶叫がこだまする町、88星座町。

晴天の空の下にある町は、今日も平和です。

他星座の一人マ

INI 牡羊座 天秤座 山羊座

「ファックユー」

「うわ、いきなりなんてこと言つてくんだコイツー！」

「いいじやんかよ天。変人同士お似合いだつての」

「んだと羊一・・・・・よしキッズ、お前からもなんかいってやれ」

「・・・デメキン」

「（ピシッ）・・・上等・・テメー等士に還してやる。表でひや」

「どつから出したんだよその日本刀！（逃走）」

「アンビリーバボおー（逃走）」

「あ、逃げんじゃねえ！」

1話 蟹座 魚座 蟻座の巻き（後書き）

こんなふうに文が少し（凄く）おかしく話の内容もおかしく進んでいきますw；

文才もなく読みづらさだと思いますが今後も宜しくお願ひします！

2話 双子座 天秤座 + 蟹座の巻き

「・・・あーあああああああ」

机に突つ伏して不幸の溜息といつてもいいくらい長く暗い吐息を吐く洒落た赤縁眼鏡をかけた少年。

一束にまとめてある自分のライトグレーの髪をぶらぶらと揺らす。

「・・今日、蟹の奴^{カイ}こなかつたなあー」

2話 親友と家族の大切さ

放課後。

ついに学校にこなかつた友人を思い、双汰^{そうた}ははあともう一度溜息をつく。

暁色^{あかつきいろ}の夕焼けの空は眩しく、眠氣と共に孤独感を促してきた。

「おい、双汰。帰ろうぜ?」

そんな空氣を見事に破ったのは学生服をしつかりと着こなしている天^{そら}だ。

紺色の髪色は相変わらずサラサラとした美髪。それを見て若干羨^{じやっかなんうらや}ましいと思つ双汰。

高校3年生である天と高校1年生の双汰はもちろん学年も違けばクラスも違う。

だがこの2人は親戚。そしてその近い親戚の中でも一番年上で社

会人である水祁に世話になつてゐるのだ。だから帰る家は一緒にうことで登下校は共に行動する。

「ほーい」

「・・・あれ？あの嬢ちゃんは・・・？」

いつもは側にいる人物を脳裏に浮かべ、あたりをきょろきょろと見渡す。

「休みー」

「へえ、珍しい。てつきり俺が来たから逃げたのかと思つた」

他人が聞いたらただの皮肉にしか聞こえないような一言弦き、1年のクラスへとずかずかと入る。まあ双汰以外に生徒などいないのだから問題は全然ない。

「天兄そらにいがあんなことしたからだろ？おれもビッチかつつーと蟹に同情する」

「・・・あの時の俺はただ純粋にお前等ガキ共を喜ばせようとだな・」

「・」

あれば暑い夏の日。

小学6年生の天は小学4年生の双汰をカブトムシ獲りに行こうぜと誘つた。

無論男の子であり好奇心旺盛の双汰は快くその誘いを受け、2人だけでは寂しいからとその時から友人であつた蟹カイを誘つたのである。そして保護者として当時17歳だった水祁も引率していた。

ショッパンつから蟹は男子と間違えられたり色々とハプニングはあつたが子供3人のテンションはぐいぐいと上がつていた。

『ほら、カブトムシー!』

年長でもある天は得意げに年下の子供に誇らしげに見せる。そして湧き上がる歓声（2人分）。

『すつゝおい!』

『はは。じゃあもつとおもしろいもの見せてやるからな』

もつとおもしろい」と。そう聞いて子供達は目を輝かせ、おもむろに糸をとり、カブトムシの雄おお雄おおしい角に巻きつけ始めた動作を見つめていた。

白い糸はきつくまかれ、よほど強い力をいれなければ切れないと天にあつた。

『よーく見てろよ? 嬢ちゃん』

その白い糸をぐつと天は握り締め、渾身じんしんの力を持つて力強く引っ張つた。

ぶちやつ。

なんともグロテスクな音が森の中に響く、といつより蟹の鼓膜に

響いた。

蟹は田の前で行われた事にただ呆然とし、双汰も青褪めていた。

糸を引っ張った直後、綺麗にカブトムシは頭だけがとれた。もはや神業の粋だ（よい子も悪い子も真似しないよーに）。

黄色っぽい・・緑色っぽい血液ともいえる液体がどろり、と姿を現した途端、蟹はそのまま氣絶。

その後家に運ばれたのだが、目を覚ますと同時に天を見て『頭とられる

!!!!』と叫んだときすでに彼女の心の中にはトラウマという癒えない傷が残されたのである。

そして今現在も進行中。

それが暑い夏の日の出来事。

「にしてもおかしいなあ・・・・頭じゃなくて足一本一本とるほうがよかつたか？」

「いや、どちらにしろただ引かれるから！ていつかカブトムシ好きな人にとっての冒涜なんだけど！全国のちびっ子に謝れ！ムシキグに謝れ！」

「お、懐かしいな。俺もつてんの全部レアカードだぜ？」

「マジで？？！じゃあ「スーパーマシング」とか持つてた？！」

「持つてた。多分もう埋まつてると思うけどな」

もはや話が逸れてきてる。

「おーい、お前等帰宅部生徒だろー。いつまで校内にいる気だ、さつさと帰りなさい」

『うーっす』

少年2人は教師によつて熱氣だつたテンションも下がり、それぞれ教室から出て行く。

「双汰、今日の夕飯なに？」

「トマトと生ハム、アスパラガスと天兄の嫌いなセロリを入れた冷製パスタ」

「…………おい、セロリはやめろ。せめてブロッコリーにしろ」

夕食のメニューの具材を聞いてそう言つたセロリ嫌いな天だったが、

「それ天兄の好物じやん。好き嫌いはいけませんよ、もおつ」

まるで母親のごとく台詞を吐いて双汰は笑顔を浮かべた。それに、天はただ引きつった笑みを返す。

「まあセロリ調達しに行くから天は先に帰つてて？」

「おう…………って待て！！調達しに行く？それってイコール俺への嫌がらせのためにわざわざあんな野菜買いに行くのか？！」

「はつ、しまつた！」 違つ違う違う。麵買いに行くんだよ！

口を塞ぎ、手を振つて弁解しようとしたが、すでに「しまつた」と日常会話のときの声より大きな声音だったのでばれています。

「お前帰つたら…………！」 天はすでに腕をクロスさせて防御体勢にはいつていてる双汰を睨み、掴みかかろうとしたが、「あ、生徒会長…さよなら～」 という学校の後輩数名に呼びかけられたので上げた拳をおろし、じろりと表情を一変させた。

「はい、さよなら。気をつけて帰つてくださいね？」

聖母の微笑と贊否を送つても足らない笑顔で天は挨拶を返し、生徒を見送つた後双汰に視線を戻す。

「家に帰つたら覚えてろよ？」

「いやいやいやいや……それよりさつさつきの猫つかぶつけめどこに？！」

「あれは社交辞令！一応俺生徒会長だし！」

「どうから湧き出たんだよその設定！」

飛び交う言葉言葉に最終的に天が面倒くさくなつて「先に帰る！」

という発言で終止符がついた。双汰も叫び疲れでぜえ、はあと肩で息をし、スタスターと家へ帰つていく天を見送つた後、「セロリ買わなきや」と八百屋へと向かつた。

結局買うんですか。

IN 八百屋。そこで、双汰は運命的（？）な出会いを果たす。

「蟹！」
カイ

「ああ、双汰じゃないか。その格好を見ると学校終わつてから直で来たんだね」

夕暮れにも映える銀色の髪色をした少女は、片手に赤く熟したトマトを持って笑つた。

「そうだけど……んなことよつて、なんでここに？」

「夕飯の食材を買いにだけど？」

少々抜けた答えを返してきた蟹に、双汰は「ちがうちがう」と首を振る。

「今日ガツコ一休んだじやん。腹痛だつて聞いたけど・・・大丈夫なんか？」

「うん、大丈夫。腹痛つていうより・・・」「ストレス」だつただけだから

「・・そ、そう、か・・」

16歳にしてストレスを抱えているという発言に、これ以上深入りしてはいけない気がした。

まあ蠍王さんと氷魚の相手してりやあ誰だつて疲れるわ・・

少し失礼なことを思いつつ双汰も蟹の隣へ立つた。

「蟹ん家は何つくんの？」

「冷やし中華。双汰は？」

「冷製パスタ。やっぱこの時期は冷たいもんがいいよな。今度一緒に飯食おうぜ」

「そうだね」

日が落ちていく中で、2人はそう約束を交わした。

他星座の「口」マ

IN 魚座 水瓶座（喫茶店にて）

『あれ、何してるんですかこんなところで一人で（最後強調）』

「仕事の打ち合わせだ。予定時間より早く来てしまつただけだ」

『大変ですね。・・息抜きに占いでもしましようか？』

『まだ暇だし、かまわない』

『では・・・これ、引いてください』

「・・おみくじ？占い師なのにか・・？」

『細かいことは気にせんで、さつ・』

「わかった・・（引いた）」

『えーと・・吉ですね。物事は上手くいくでしょう。しかし待ち人はぼうつとしてたら通り過ぎていきますので注意。

それこれから自分の身に災厄が降りかかるでしょう。その時自身の天敵に注意です・・気をつけてくださいね』

「ああ。・・・・・天敵、か』

2話 双子座 天秤座 + 蟹座の巻き（後書き）

他星座の1コマは次回予告っぽいです
お気に召していただけたでしょうか？
次回は明日更新したいと思います。

「アーティストの世界」

「水祁兄？風邪？」

台所で食器を洗つてゐる途中、奇妙な咳を漏らした水祁が気になつて双汰は顔色を窺う。

3話 風邪と天敵

食器が血だらけになり、そしてぐらり、とスローモーションのように水鉢は倒れていった。

がたーん！と大きな物音に、自室にいた天そらでさえも駆けつけてくる。

「なんか今すげー音がつ・・・つて水祁兄じやん! ビーしたんだよ
血い吐いて・・倒れて!!」

青褪める双汰の顔色と口の端から血を流して倒れている水祁を交互に見やり、天は額にじわりと汗を浮かべた。

そして呼吸を整え、細かく息を吐いている水祁の額に触れた。

「……」「れは……」

「え？ なに・・・」ミナ兄ひつじつかやつたの？」

すでにわいつ涙腺が歪み、泣きそうな双汰に天は息を吐いた。

「風邪」

しばしの沈黙。

双汰は眼鏡の奥の瞳を丸くさせ、きょとんとしている。

「……風邪？ ……でも吐血してんじゃん……」

「……いや、これは吐血じゃない……」

むぐりと水祁は頬を蒸氣をせながらも言ひ。

「ただ「大丈夫だ」って言おうとしたとき舌を歯んでつこでに唇も
切れて……」

「ついでで唇が切れるかああああああああああああああ……」
「まったく・・・ミナ兄はお転婆さんだな」

つん、と。頬から流れる血を拭う水祁の額をつつく天。

「どこかく病院行こうよ。あれも一緒にこいくから！」

とにかく病院行こうよ。おれも一緒にいくからー！」

「大丈夫だ」双汰はお前に用事があるたゞ?俺1人で行つて

「ほんとに大丈夫? ミナ兄」

熱のせいでふらついている水祁の安否を気にして中々引かない家族に、水祁はただ苦笑する。

「ふむ。機械がいいやつだ」

「で・・・でも・・」

「じゃあ行ってくる

最後まで話を聞かずに、水祁はこれ以上心配かけまいとラフな格好のまま台所を出て、靴もかかとを踏んだような状態で家を出た。

「・・・病院には・・・「あの人」がいるのに・・・」

1

相変わらず薬の臭いと老人の香りが満ちている静かな病院内。

「」の88星座町の病院は正式名称「総合病院カансステレイシャン」。通称「星座病院」と安直な呼び方で親しまれている1つしかない病院。

1つしかないとだけあって設備は快適であり、診療科は内科・外

科・小児科・産婦人科・皮膚科・眼科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション科・精神科・麻酔科の10科。充実しており、もつと細かくすればもうひとつある。

そして廊下を歩く途中、ふと水祁は思い出した。

『災厄が降りかかるでしょう。その時自身の天敵に注意です』
(・・「天敵」・・・いや、まさか、な)

「・・・」

水祁は現在38・7分。高熱状態であり、行き先は内科。
「内科」と書かれたプレートを手指し、受付の看護婦に診察願いをした。

「珍しいですねー、水瓶座さんが風邪なんて」「たしかにそうかもな・・・」「ええ。あ、じゃあ診察室にどうぞ」

看護婦の女性に促され、水祁はドアノブをひねり、病室の扉を開けた。

そして待っていたのは

「ああ、いらっしゃい」

だあん！――！

医者の顔を見た瞬間扉を閉めようとした水祁だが、それは素早く医者の手によつて阻まれる。

「つぐ　――」

「病人が逃げようとしてんじゃねえよ」

そう冷たく言い放つたのは、水祁の「天敵」といえる人物、蠍王かづみであった。

今の蠍王にとつては熱でふらふらしている水祁など敵ではなく、すぐに腕を掴んで室内に無理やり引き込み、近くにあつたパイプ椅子に座らせ、落ち着いたところで自分も腰をかける。

「（うわ・・あの占い当たつてやがった）・・・何故貴様がここ？」

「俺お医者様だよ？病院にいないわけないじゃん」

それぐらいは水祁にも理解できる。馬鹿にされたのかと眉根を寄せながらも、平静を取り戻して尋ねた。

「お前は内科医師ではないだろ・・？」

「ああ　・・そゆことね」

にこゝ、と。最初に見せた口調も表情もすでにはない状態で笑顔を灯す蠍王に、ある意味水祁はぞつとした。

「内科の先生が「オレもつ嫌だ！」とかいつて逃亡してさあ。至急すんげー暇だった俺に先生見つけるまで時間稼げってさ。いやあ、よかつたよ君で」

「俺はよくないがな。」

聞くが、その「先生」とやらはまさか・・・

「鷺座の鷺君。志牛さんと双子の弟のつひの一人だよ」

その返答に、やつぱりと水祁は頷く。

「あいつ女嫌いだからな・・・」

「・・ま、その話はいいとして・・じやあ診察始めよっか」「待て」

嬉々とした表情で聴診器を向けてくる男に、水祁はのけぞった。

「何故だ？今お前状況説明終わつたばっかりだろ？」

「君、いますっ！」^{モトネタ}顔赤いよ？ぶつちやけ話すのもつらこでしょ」

図星であった水祁は沈黙の回答をする。

蠍王が言つようになれば視界が歪み、頭は痛く喉も痛い。さきほど扉を即座に閉めるという蠍王に對しての拒絶行為もいつもより反応が遅かつたのがその証拠である。

「だからこうして俺が直々に診察してあげるつて言つてんの」

「結構だ。逆に悪化する・・・聞いたぞ？お前幼女の血を見て興奮する性癖が・・・」

「ないから。てかその元情報最初より捏造部分が多いし」

「獅貴から聞いたんだが・・・」

「アハハ、あの野郎」

額に青筋を浮き立たせ、蠍王は頬を引きつらせる。

それを見て息を吐きながら、水祁は背もたれに体重をかけた。

「とにかく俺は待つ」と云ふ
「いいの?」

蠍王は面白いものでも見るかのようにじっと水祁を見つめる。

「鷺君、女の子は嫌いだけど好みの男ならOKな子だよ? そういえばこの前水祁のこと「モロタイプ」って言つてた記憶が
「薬をくれ。すぐ帰るから」

色々寒気がした水祁は冷たい汗をながしながら手を出す。
蠍王は「最初からそういう言えばいいんだよ」といしながら引き出しをさぐる。

そして妙に慣れた手つきでパソコンの操作をし、てきぱきと薬を選出して最終的に小さな袋に纏め上げた。

「診察したらただの夏風邪だったみたい。だからそこまで強くない薬だしこそいたから。一応全部で2種類。朝晩で計6錠飲んでね?
2日分いれといたから」

「・・・ああ」

水祁は意外と真面目に診察をしてくれた蠍王に畳然としながらも氣力で頷く。

「なに? その日ーーー毒でも仕込んだ方が良かつた?」「いや、やめろ。・・まあ助かった」「ん。じゃあ受付にいつてお金払つて帰つて永久に眠つてて」

爽やかな笑みを浮かべた医者に水祁は中指を突き立てる。
そしてばたん、と。音を残して去つていった。

人一人いなくなり、静けさが戻った室内に、また静寂を破る声が発せられた。

「…………意外だなあ」

蠍王は、ふいに白いカーテンの向こうから聞こえた声に向ける。

「仲悪いとかつて言つたが、なんだかんだって仲良いじゃん」

そういうひょっこりと頭を出したのは『君』。彼はただ居眠りしきただけだ。

「『クン、気味の悪いこと』といわなうでよ」

「んじやあなんで？」

「病人相手に嫌がらせするほど馬鹿じやないよ」

パソコンのディスプレイに表示されている薬一覧の表を閉じ、蠍王は笑つた。

「借りとかもつべつとかなきゃ」

「・・・悪役だ・・・」

苦笑混じりの咳きは虹色の室内に溶け込んでいった。

I II 乙女座 牡牛座 山羊座

「志牛、私いつも不思議に思つことだが・・・」

「なんですか？乙婁さん」

「キッドって・・名前誰が付けたんですね、キッド」

「ミートウー」

「たしかに謎ですね。まあ謎がなかつたらいの子はなんですかって感じしませんか？」

「・・そうですね」

「リックストウーミー。マイネームイズタゴサク」

「・・え？今なんていつたこの子。田畠作つていつたんですけどー・」

「・・違いますよ。団子作つて言つたんですよ。あつと」

3話 鶯座と水瓶座の巻き（後書き）

男ばっかで華がなかつたです

「明日」といいつつも「明後日」になってしまった罷…
次回は少し長くなりますw

ちなみに鶯座が名前だけ出でましたが、今後も出でくると思ひます。

牡牛座（志牛）には弟が2人います。それが鶯座と白鳥座。
なぜこの2人なのかというと、この3つの星座はゼウスが意中の相手を拉致るために変化した動物として有名な星座だからです。

ちなみに何故鶯座が女嫌いなのか。それは鶯座がさらつたのが美少年として有名な男の子だから。そつからきてます。ちなみにそういう要素はないです。香りはすると思いますがえ

4話 バラマ出演?の巻(一)(前編)

何話かはこれがメインで続きます。

4話 バラマ出演？の巻(一)

「ていうかさ、あんた今売れてンの？」

ある一言から、なんか色々と始まった。

第4話 映画に出てみない？

獅貴は、近所の子供その一である天にかなりショックなことを言われてしばし硬直した。その隣で、弓壺が苦笑する。

「天くん、獅貴は88星座町では活動しないんだよ~」「ああ、都会でやつてることか。どうりで・・・つていつもこんなところにいることは結構な暇人なんじゃねえの？」

「暇人」。そこでも矢が心臓に突き刺さった獅貴。「ぐふおっ！」と血糊で吐血演出をしたが誰にも突つ込まれず話しあは進められていいく。

「あ、じゃあ獅貴の仕事場行つてみよっか！」

「お、せーんせーーー！」

「ちょっと待て！！！オレの心をズタズタに引き裂いた後になにいつてんだよーーー！」

復活した金髪男に少年と青年はにせつと笑う。

「いいのかよ。お前を仕事無しのダメダメ俳優と格付けするが」「わかったよ！…いいよ！…くればいいじゃん！…」

大の男が泣いて蹲る姿は滑稽といえるが、天と『吉』「よし、じやあ人集めてこよう！」と小学生男子のノリでわ つと散つていった。

「・・・え？！まだ増えるのか？！？」

【1】

「天あ、お前本当に友達いねんだな」

好敵手＝羊一ライバルをつれてきた天。

「つるせー」

否定はしない青少年。

「何故俺だ・・・? 3話に出たばつかで疲れているんだが」

「同業者（作家）ってことで協力してよ」

水祁みなぎを連れてきた。同業者といつだけあつて特に関係性はない。

「・・・なんですか」の団体は

その状況を見て獅貴を見据えるのはマネージャーである乙婁だ。

「まあなつちまつたもんはしょーがねー。乙婁、ドリマの収録があるだろ？仕事場見たいって言うから関係者カード渡してやってくれ」

「はいはい。・・じやあ皆わん、これをどうわ」

「関係者」と表記されているカードを手渡され、4人は首にかける。

「んじゃあ車で出発するから。星座町を抜けて至高天ヒカルテンまで行く

至高天とは「都會」のことであり、その周囲には「都市」、そして「町」、「村」と存在する。88星座町は100はある平凡な町のひとつにしか過ぎない。

町の中でも田舎ともいえる星座町はあまりメディアが発達していない、興味のある者しかバラエティーや歌番組などを見ない。ほぼ3分の2がニコースばかり見るのが星座町の住民。

だから、今の流行などには鈍感であるが故、売れっ子俳優の獅貴の存在ですら疑うのである。

「つーかテレビへりこ見ててくれよ・・お前等本当に俺が出てる番組見たことねーの？」

助手席で頃垂れる男に、4人のうち3人頷く。ちなみに見たことあるのは「志だけだ」。

「つていうか俳優っていうこともこの前の会議（0話）で初めてしつたし」

「「つむテレジないし」

「・・・「デビューしたのがいつだ?」

思い思いに吐き出す3人に、獅貴は息をつく。

「デビューは10歳!子役からだよ」

「売れてきたのは12歳にころからでしたよね。ある映画の主役の弟役で」

車を運転している乙婁が当時を懐かしむように語った

「・・・乙婁はいつからマネージャーに?」

「私は18歳からですよ。だからまだ2年しかたってません。でも有能なマネージャーとしてお褒めの言葉を頂いています」

水祁の問いに答え、乙婁は小さく笑った。

その横顔を、獅貴はどこか悩ましげに見つめる。

「・・・乙婁、お前・・・老けてんな」

「マンホールの中にぶち込みますよ?」

笑顔のまま言われ、獅貴は背筋を震わせた。

そしてやつてきた大都会至高天。^{エンドビデオ}

まず車から降りた天は頬を紅潮させ、目を輝かせた。

「うわあ・・・やっぱ都会はすげえな、たくさん「人間」がいる

！」

至高天にいるのは獅貴たちのように「星座」などの特有の血筋や能力を持つていなければ人間達だ。役目も無いため、つく商業も限られずどこに行つてもいい。

至高天に住んでいるのが人間達で、都市・町に住むのが「星座」や「神々」、そして「悪魔」や「幻獸・聖獸・動物」。村に住むのは上記の人物達が集まつておこした村などだ。

そしてそういう「人間」とは少し違う種族は、「人間」のこと

をビーチンを呼ぶのだ。

「ぶらぶらしてんな。こっちだぞ」

獅貴がひらひらと手を振つてゐる。有名人だからやはりお決まりのメガネと帽子を被つていた。

「ほいほい」

「あ、待つてよ羊一」

「はあ・暑い・」

都會には何度も来たことがある3人はすいすいと人ごみを抜けしていくが、はじめてきた天そらは流されるばかりで、思うように進めない。

それに水祁が気付き、手を差し伸べる。

「・・・手」

「・・繫いでくの?」

頷く水祁。だが、天がそれを拒否した。

「やだよ、こんな年にもなつて手え繫ぐのなんか!」

「・・・ そうだつたな、悪い。俺はお前の母親ではないからな・・・
「いや、母親でも繋がないから！まあ人ごみ抜けるまでならいいけどよ・・・」

そんなやり取りが繰り広げられながら、テレビ局までついた6人。
こつちですと乙婁に促され、ともかく見学者である4人はマネージャー専用の部屋へと通された。

「まあとりあえず収録が始まるまでここで待つててください」

「何時からなんですか？」

「12時からです。あと30分つてとこですかね」

頷いた天は「思つてたよりも早いな」と呴いてから後ろの3人を見る。

「弓壱は獅貴の演技みたことあんだけ？どんなカンジ？」「どんなカンジ？素人から見た俺から言わせれば「すう」との一言しか浮かばないなあ」

「弓壱自体もよくわからないらしい。」うううのは乙婁にきいたほうが賢いのだが、頼れる彼女は仕事のためもはやいない。

「・・・どうでもいいが俺は今書いてる小説の原稿の締め切りが明後日なんだ。早くしなければ・・・」

こんなときまで仕事専用のノートパソコンを開く水祁。それを見て、弓壱は笑つた。

「真面目だなあ。俺なんか締め切り今日だつて言つのに
「じゃあ仕事にもどれ」

誰もが頷く正論を、弓壇は軽くスルーし、「そろそろ時間だね」と言つて立ち上がつた。

呆れながらもうなずいた3人も立ち上がり、ドアを開いた弓壇に続こうとしたが、ここで、ある人物と遭遇する。

「・・あれ? 弓壇・・?」

「蠍王くん・・?！」

タートルネックの上に白衣を着た、暗赤色の髪色をした端麗な容姿の男が、驚きに目を見開いている。その後ろには、いつもは伸びきっている銀髪を櫛で綺麗に梳かし終え、どこかの高校の学生服を着用している蟹カイがいた。

「・・弓壇さんこ、羊一に水祁さん　・・・・そ、天さ・・・！」

天の姿を確認した後、条件反射で頭をおさえる蟹カイ。その顔は真っ青で、今にも氣絶しそうだ。

「んな怯えんなよ嬢ちゃん・・・」

その反応に苦笑いしつつ、天も蠍王を見た。

「どうして2人がここに?」

「んー・・なんか知らないけどさあ・・久々に蟹と出かけたら変な人に「協力してください!!」つてなきつかれちゃつて・・」

「よくわからないが、1話目に登場する医者役と主役に依頼をする女子生徒役がインフルエンザにかかつてしまつたらしくて・・」

「うつわあ、不幸の連続だな」

羊一がヘッドホンを取り外してケラケラと笑う。

「別に俺が出るのほいよ？でも蟹が全国ネットで流れるってのが許せないんだよねえ・・・。ただでさえこんな可愛い子、テレビの映つたらどうなると思ひ？」

「どうもならなによ。あとすひじく恥ずかしいからやめてくれないか」

本人からの否定。

というか本人以外は何も言わなかつた。同意はしがたいが否定はもつとしたくなかった。

「でもや、Jの1話だけなの？出演するのは

J壱が尋ねると、蟹が苦笑する。

「それが全20話のところ、3話まで出るらしい。元々この役にはマイナーな俳優を頼んでいたらしいからこれでも少ないそつだ・・・・といいたかつたが、状況が変わつた

蟹の言葉に、蠍王を除いた全員は首を傾げる。

「Jのドラマの監督が蠍王とわたしの「コンビ」が気に入つたらしくてな、Jのドラマでわたし達の評価が高かつたら最終話まで採用するというんだ・・・

「すげーじゃん。頑張れよ

応援する羊一だが、蠍王は不機嫌だった。

「違うね。あの女好き監督ただ蟹に田えつけただけだ！でも俺を降ろすと蟹が拒否するからそんな条件をいったたまで！！きっといつか手籠めにす「お前の妄想はどこまで続くんだ！！」だいたいわたしは可愛くないし男から好意など受けたことも無いぞ？！（悲しい事実だが）」

最後まで言わせず遮ったその叫び^{ヤロー}、「ああ・・・」と残りの男達は思った。

【そりゃそーだ。片つ端から蠍王^{サムライ}が潰してるし】

だが、そのもう一つの事実が彼女の耳に伝わることはないだろう。

続く

4話 ドラマ出演?の巻(一) (後編)

2・3人くらいしかキャラをつかめてない事実

続
(2) (前書き)

続きを読む。

続 (2)

ざわざわざわ。

ついに収録。まずは台詞合わせからのリハーサルが始まろうとしていた。

第4・2話 役者になりますか？

「あー・・・だるつ」

そう呟くのはこのドラマの監督。まだ24といつ若さで何本もの映画などを成功させている期待の星である。

上記の発言もそのせいで天狗になっているからとかそんなんではなく、元々そういう奴なのである。普通なら怒りを買つような態度も、顔が良いためうまくカバーされている。

「あ、あの人は・・・」

その様子を遠くから見つめていた弓吉・水祁・羊一・天は日を瞬かせた。

「志牛さんの弟の、白鳥座の鶴さん」

志牛の2人の弟のうちの1人、鶴は映画監督。そして双子の弟である鶯座の鶯が男好きときたら兄貴は女好きである。志牛には汚れた部分をもつ双子。

「あ、ほんとだ。なつつかし。双子でも一卵性だから相変わらず似てないなあ」

やうやうじりと見ていたせいか、鶴はこちろに眞付いたようすで、イスから立ち上がり近づいてくる。

そしてにやりと笑顔を向けてくれた。

「ひょくんじやないか。久しづり」

「はい、お元氣そうで。鶴さん」

友好的に握手をしあう男2人に、なぜか感動すらも感じられる残りの3人。

「と、水祁。相変わらずでけえな、お前」

「お久しぶりです、先輩」

鶴はにかりと笑い、10センチは差がある水祁の頭に手を伸ばしてくしゃくしゃと撫でた。

2人は同じ高校の出身であり、先輩と後輩という立場だった。

「あとは　・・牡羊座と天秤座の子供か。5年はあつちに帰つてなかつたから懐かしいもんだ。羊一なんかあのとき中坊だつたら？天は小学生だつたな」

「俺今19歳だから子供じゃないすよ、おっさん」

「オレだってもひ高校せいだ、おっさん」

生意気なガキ共は直後おっさん・・ではなくお兄さんから頭にチヨップを食らひ。素早く一瞬なのに、何故かじんじんと痛むらしい。

「ま、立ち話してゐ間に仕事始まるから手短にいつけどよ、ちゅう

「どうがつた。左から職業いつてきな」

「美容師兼学生」

「取材記者」

「小説家」

「作家」

どんどん字が減つていつてゐる。と、そんなことはどうでもいい。鶴は満足そうに頷き、びしりと4人を指差した。

「お前等エキストラやつてくれよ」

『却下』

「いいですよ~」

同意したのは『却下』だけであつたが、鶴はその返事を全員同意と受け取る。

「あと少し台詞あるんだ。まず「クラスメイト役」に天。^{そら} お前すぐ
え美人じゃん? ま、頼む」

「ええ~・・・つか美人つていうなよ、きもい」

素直じゃない子供に頭突きをかましたあと、頭を押さえて蹲る天
から視線を外し振り返る。

「んで、羊一。取材記者ならちよづじい。新聞会社の社員役な

「まじっすか」

「水祁と『却下』は普通に喫茶店の客役やつてくれない?」

「いやで「わかりました~」

返事をきいて満足げに頷いた鶴は、「んじゃ頼むな～」といつてリハーサルを見に行つた。

【一】

「まさか^{まさか}蠍^{かに}と共に演することになるとは・・しかも医者役つてモロハマリ役」

台本をもつて頭を抱える獅貴。プロでも相手が相手だとやはりちよつといやだそつだ。

「俺だつてまさかドラマに出るなんて思つてもみなかつたよ?あと君つて主役なんだね」

台本から田を離さず蠍王は言つ。

「・・・蠍・・たしか素人だよな?」

「そうだけど?」

「じゃあなんでそんなに偉そつなんだよー!ー!」

普通は獅貴や大物の出演者にしか配られないような弁当をほおばり、獅貴に用意されたイスを陣取つている蠍王。

「いいじやん。君のなんでしょ?·わから誰も文句いってこないしねあ」

たしかに、誰も文句など言つてこない。

それは獅貴と顔なじみらしいという理由もあるが、それより「蠍

「座」の持つ能力であるニーステリアスな雰囲気が妙に近寄りがたく邪険しそういからである。

「…はあ。リハーサル始まるからそろそろ位置につこうぜ。台詞は覚えたか？」

「一応」

「蟹は？」
カイ

「エキストラの女の子たちに囲まれてた」

その言葉に、獅貴はぎょっとした。

自惚れてはいないが自分にファンが多いのは自覚している。一般募集だったエキストラ組の女子はほぼ大半がそうだ。しかも蠍王は容姿とオーラもあり人を男女問わず惹きつける男だ。そんな2人と関係性があるとなれば、不愉快に思う女性が多い。

「大丈夫なのかよ、ソレ！」

「大丈夫も何も俺今凄くむかついてるんだよ、何アレ」

じろりと蠍王は暗がりで群がる少女たちの集団をにらみつけた。まさかと思い獅貴もそれに倣つて少女たちを見て、

「は？」

間抜けな声を上げた。

たしかに獅貴の予感どおり蟹は少女たちに囲まれている。だが文句をいわれたり、何かされているわけではなかつた。

「あの、蟹さんつてこの収録終わつたあと暇ですか？！」

「！」の後？暇ではないですが用事があるとこうわけでは・・・」「その銀髪つて地ですよね？！「12星座」のお役目も持つていらして素敵です！！

「そ、そうですか？あ、ありがとうございます」

「このドラマをきっかけに役者デビューとかす

「いやいや、そんなことは…」

「よろしければスリーサイズを！！」

「そ・・・そういうわれても私自身

「…せじあひせはひ呼めへだせ」

「あ、ずるーい！いいなあ、あたしもあたしもー！」

「うふうと呟れど、蟹やんねわたしと話をついて。」

質問攻めの荒らしの末結果色々いじられている蟹

それを見つめて、獵費はただ呆然としていた。

「女子って怖い・・・」

「おまえがなまこでいたせん」はられてわ

「これは俺がいじつて、独り占めなの！」

一 おい、素直のはいが下心がある本音は隠せよ

ニヨウジツノハシマリノカミタツノハシマリ

ても心配してしまった。

相性が悪い3星座として有名な蠍座・獅子座・水瓶座だが、もはやその気持ちは眞の親友のようだつた。

2

「はーい、じゃあ学校でのーシーンからー。」

若い男の声により、出演者からエキストラまではつとじ、自分の役をたしかめ配置について。

「『愛』が主人公の『武内』に悩み相談をするシーンから。」

ちなみに話しのストーリーは「うだ。

主人公は武内主澄。たけうちすすむ教師兼「惱事受付屋」ノウゴトウケつけやという個人的事務所を開いている。「仕事しろよ」と言われるのが日常茶飯事。

強い靈力を持っており、そのためか悩みを解決してくれと頼まれる仕事は幽靈のことばかり。獅貴が主演ということもあり、期待が高い作品だ。

そして蟹がやる「愛」は本当はこの回と次の回らへんで終わる使い捨てキャラだが、監督の言葉により今後も続行になるかならないかが決まる。

「んじゃリハからよーい、スタート！」

緊張感が高まり、さわがしいクラス模様が演出させられる。

『ねえ、愛あ。顔色悪いよ？』

『そ、そうかな？大丈夫だよ』

リハーサルとはいって、皆至極真面目に演技している。

さきほどまで子供のような笑顔を浮かべていた監督である鶴も、づくみじっと演技を見つめていた。

『ちょっとあたしトイレ行ってくるね？』

『うん、行ってらっしゃい』

愛は立ち上がり、飛び出すように廊下をでた。

「はいオッケー！本番もそんな感じで頼むよー。じゃありハは十分行つたので本番こきまーす！」

「え、もうっ…！」といつ雰囲気が一部で流れだが、一応リハは1時間やつたわけだ。そろそろいこいあいだらうと思つもののほうが多い。

「んじや本番…」「愛」が暗闇の中、3学年の「祥」^{しおうご}を自分に憑いてしまつた悪靈と勘違にするシーンから！「スタート…！」

「」で、Hキストラ役として演出を見ていた羊一が、はつとした。

「…おー、弓華…！」

小声だが、力強く隣の「弓華」を揺わせる。

「天は？」
「…出番…あ…！」

弓華も気付いたらしく、水祁のほづく振り返つて額に汗を浮かべた。

「まさか、天が…出番、なのか？」

「愛」と対峙する上級学生役…。

イコール

だ。蟹と天が、お互いの役をしらぬまま対峙してしまつ。といふこと

続く

続（2）（後書き）

白鳥座が監督として登場しましたー。

多分この回が終わった後はあまり出てきません。

相変わらず文才がないですが、続編も宜しくお願いしますw

続（3）

学校に荷物を忘れた。
しまつたと思いつつ、少女は暗い学校の中に足を踏み入れた。

第4・4話 本番スタート

緊張感高まる場面は蟹^{カイ}が演じる「愛」によつて構成させられており、ある3人を除いては全員その役に魅入つていた。
そしてある3人、羊一^{よういち}・弓壱^{ゆみひと}・水祁^{みなぎ}は青褪めながらその続きを脳裏に浮かべる。

「きつと「天さん?！」とか叫んで失神じゃね？」
「だらうね~」
「・・・・・・だとしたら追い出されるかもな」

そうじとじん先を考えていぐと涙が出そうだった。

『・・・不気味』

そういうつまづいていくうちに、ついに対峙シーンへと入っていく。

ライトあたりを照らす「愛」。そして、暗闇の向こうに光を射

した時、ぼう、と現れた、学校の靴と足。ライトは、進んできたその人物を映す。

『君は』

普通に台詞を呟いたつもりだった「祥一」役の天だつたが、ここできよっとした。

何故、この子がここに？！

• • • • •

しかし「蟹」はすでに蟹の田ぐれと変わつてゐる。

暗闇から現れた超苦手人物は、彼女の心の中の恐怖を増幅させ、暑い夏の日に生まれたトラウマが甦る。

「ニヤキの音をしたくなるのが、何よりも嫌だ。」

『 ? ! 』

設定と違うシーンに、そしてムンクともいえる蟹の様子に監督な
ず他の人々までも目を見開いた。

「ハーハーハーハーハー」来ないでください……それ以上近づかないでください

緊張プラス暗闇プラス超苦手人物＝パニック。と、なつた蟹はもはや何を言っているのかすらもわからない状態でただ泣き叫んだ。迫真の演技（？）に誰もが口を開口させたまま、止めることすらも忘れて先を放る。

「おこ・・今はつ・・・」

がつーと落ち着かせようと肩を軽く掻んだつもりが、混乱に拍車をかけ、蟹は腕を振り払い、身をよじりながら壁に手をつく。

「も、ももももしかして私の頭ももぎとるんですか？！あなたの手にかかるて散つていった「彼等」だけでは飽き足らす！？」

ちなみに「彼等」とは天が頭を引きちぎつたカブトムシ達のことである。

だが、もちろんそんなことを知らない者たちは「これは・・一体どんな繋がりが・・・」ビドキドキと胸を高鳴らせる。

「あれはただ、お前を喜ばそつと・・・」

「やめてください！小さい頃、遊んでくれた記憶はあるけど、あれが・・私にとつてどれだけ怖かつたか！？」

一見学生同士のいざいざに見える会話が、何故かダークな演出になつており、監督・鶴は頬を紅潮させ、「台詞が違つじやないか」と止めに入らうとした者を手で制す。

「やらせろ。・・おい、獅貴。アドリブでいいからいい感じにつなげてくれ」
「うひつす」

獅貴はにかりと笑い、「役」ではなく本人同士としてお互いの立場を忘れてトラウマトークに走っている子供2人を止めにはいった。

もちろん、本番のまま。

『離れる…』

獅貴は蟹の肩を掴み、天を軽く突き飛ばす。

いきなり「離れる」といわれた上に突き飛ばされ、天は文句を言おうと獅貴を軽く睨んだが、今は「演技」の途中だといふことに気が付き、立ち上がる。

『お前は悪靈だな?』

『・・・・・・・』

何も言わずに立ち去る。これが今の状況にぴったりだと思つた。そしてこいつらも正気に返つた蟹はまつとし、獅貴を見上げる。

『あ・・ありがとう』ぞこます。先生

『今のは一体?話を聞かせてはくれないか?』

「愛」は、少し考えた後、重く、ゆっくりと頷いた。

「はーカット

満足げに言つた監督に、全員が視線を向けた。

「か、監督ー今のは隠してたんですか?…」「ちょっと待つてくれ、台本どつりじゃないだらつ、この話は」「説明を!」「まあまあ落ち着け」

騒ぐスタッフや出演者を静かにさせて、鶴は笑う。

「サプライズだらうとなんだらうと、この流れでいく。普通に主人公だけ目立たせるのはどうかと思つてたところなんだ。

愛役の蟹さんと、上級生役の天くんには今後も話しへでほしい。色々と気になる会話もあつたところだしな」

うんうん、ナイスアイディアと1人頷いて、「いいだろ?」と周りのものにも訪ねる。一瞬返答に困つたが、1人が「いいと思う」と口に出すと、あつといつ間に賛成の声が上がり、広い室内を埋め尽くす。

「……と、いうわけだ。「んなノリにしてしまつた君にも責任があるから、拒否権はないよ」

蟹は「はあ」と頷いて、ちらり、と出番がまだなので居眠りしてた蠍王に目を向けた。今起こすのは可哀想だから、あとにしようとしたまづ心を落ち着かせることにした。

【一】

休憩時間。

星座同士で集まり、はあ、と息をつく。

「まさかオレが「愛」と関係の深い妖怪役とはね。しかもその妖怪が「キツネ」かよ」「キツツネ耳」。楽しみだねえ」

早くも「キツネ」姿にうきつきと心躍らす『「轟」、天はドロップキックをかます。見事に決まった。

「すみません・すみません天さん。平常心を保つてるとさばくメートル離れていれば大丈夫なんですが・いきなりだつたんで混乱しちゃって・・」

「さうげなく傷つくな」とこいつよな・・嬢ちゃんじょう」

すみませんすみませんと謝る蟹に、獅貴はぽんと手の平を頭へ乗つけた。

「まあいいじゃねーか。今対処するあの魔王だぜ?」

「あ」

すっかり忘れてたといわんばかりに蟹は足を組んで悠然と座つている青年へと目を向ける。これ以上ないつてくらい眩まばゆい笑顔が逆に不気味。

「まだふくれているのか、蠍王」

ふに、と頬を掴んできた水祁に大しては笑顔を向けて「顔が近い、離れろ」といつもより数段低い声で対処する。

「蠍王、今回は私が悪い。すまない」

「俺がむかつくのは監督・まあ強気に出れない蟹も蟹だけど、過ぎたことは仕方ないわ」

蟹が酷く申し訳無せやうにいえ、だいぶ機嫌は直ってきたが、監督・鵜つぐみにはまだ怒りが抑え切れてないらしい。イライラしながら水祁の頭をいじついている。

「まあお前も評価が高かつたら出演決定なんだからさ」

獅貴が慰めるよつに言つたが、それは何の慰めにもなりはしなかつた。

「別に俺はドラマに出たいわけじやないんだよ・・・でも蟹が強制的に出ることが決定したなら頑張らなきゃねー・・・」

しかし気休め程度にはなつたようだ。不機嫌をもとれてきて、まともな表情になつてくる。

「俺たちはもう出番ないから、あとは獅貴と蠍王だけだな」

羊一・弓張・水祁はエキストラ中のエキストラ。出番は本当に画面に数秒映るか程度。あまり乗り氣ではなかつたためこのくらいで十分だつた。

ちなみに台詞はある。

羊一は新聞会社の社員役。オフィスに響くか響かないかの声で『「ペー用紙足りませーん』』といつのがセリフ。

弓張・水祁は喫茶店の客役。「愛」の悩みを「武内」が聞いてるときの場面で、そのとなりの席にいる一般市民役だ。最初にセリフはあつたのだが、あまりにも水祁の棒読み感が爆笑しか引き起さないのでカット。

そして、場面は「武内」が悪靈のせいで怪我を負つた「愛」を知り合いの外科医に連れて治療してほしいと頼む場面だつた。

医者の名前は「日馬由一」。^{くわまゆいち}「武内」と同じく靈感が強く主人公の好敵手であり仲間であり理解者である男。というのが設定だ。

「わかつたかー？」^{むかつく} 蟻。いつものお前のその毒氣オーラは消せ」

「うつせえ命令すんじゃねえ」

獅子と蟻は笑顔をお互い浮かべたまま火花を散らした。この後どうなる」とやが。

続く

続（3）（後書き）

長編は苦手なのでぐたぐたです；
でも好きなんです

まだまだ続きます。次回も宜しくお願ひします

続（4終）

台本を投げ捨てた蠍王に叱責した獅貴は本番前10秒前に、背後から獅貴の腋下に頭を入れ、両腕で相手の胴に腕を回しクラッチして持ち上げ、自ら後方に反り返るように倒れ込み、獅貴の肩から後頭部にダメージを与えた。これを「バックドロップ」という。さあ、みんなもレッツトライ！

第4・6話 毒蠍と獅子王

綺麗に技が決まつたので死んだかと思われたが、役者魂の支えのお陰かはたまたただタフなだけか。5秒前くらいに立ち上がり、蠍王を睨みつける。

「痛えだらうが」
「悪い」

手が先に出るタチなんだ、と悪びれた様子もなく言つが、これでも謝つただけで十分に反省していることが読み取れる。

そして、喧嘩している暇もなく本番が始まった。
監督から威勢の良い合図が発せられる。

『日馬！怪我人だ、すぐに手当をしてやつてくれ！』

さすがはプロ。すぐに役の顔となる。

『怪我人？掠り傷程度で病院に駆け込むとはお前も心配性だな』

『田馬・・』いつを見てわかるねえのか。靈に障られたんだ、お前なら浄化してやることができるだろ？』

田馬はうなずく。だが、了承はしなかつた。

『何故見知らぬ他人に私が・・・』

続々と進んでいく場面に「どっちが主役だっけ？」とあつてはならない疑問符が浮くほど雰囲気は白熱している。

そして、カットの声はなしに場面は進んで行き、ついに一番の見所である田馬と武内たけうちのすれ違いによつて行われる軽い喧嘩シーンに入つた。

『お前はわざわざつまつもつまつもーーー』

武内は田馬の胸倉を掴み、眉根を寄せた。

『我慢で、横暴で、自分主義の残酷な奴だ！靈や妖怪にも、人にも、なんでも優しくできないんだ、お前は！』

「・・・・・・」

「」で、はつと周りは我に返り、焦った。ここで田馬は「うるさいーお前に何がわかるひ」と一喝するセリフが出る。だが蠍王は無言で、獅貴をじつと見つめていた。

もしやセリフを忘れたのか？！とハラハラしたが、何故か彼は綺麗な微笑を浮かべる。

そして、

「いわゆるセー」

笑を浮かべ。

「貴様に何がわかるつー！」

「いだつ！！」

そうセリフを吐いた後、獅貴の首筋に手刀を叩きつける。獅貴は痛みに呻いてがくりと膝を落とし、屈んだ状態になった。

それを狙っていた蠍王は獅貴頭部を素早く両方の太ももではさみこみ、彼の胴を抱え込むようにクラッチして持ち上げ、そのまま脳天から垂直に床に叩き付けた。

がアアあああん！！！

と頭蓋骨が落ちた音がして、うめき声さえも掠れてよく聞こえなかつた。ちなみにこれを「ドリル・ア・ホール・パイルドライバー」という。プロレス技だ。

脳天からいつたせいでぴくぴくと痙攣けいれんしている獅貴から離れ、蠍王、いや日馬として演技を続ける。

『君は甘すぎない。これは私からの餞別せんべつだ』

本来なら平手打ちだったはずだが・・・とスタッフ達は硬直しながらも青褪めた。

「はい、カーット！」

監督からのカットの声。観ていた関係者全て「いいの？これでいいの？！」と監督を見るが無言の監督。むしろ笑つてすらいる。

「・・・とにかく・・・病院に連れてけば・・・？」

提案した水祁に。

「大丈夫、獅貴は丈夫だし」

「そうそう～」

「死にたくても死ねない奴だ。きっと生き返るぞ」

まともなことを返す奴はない。

「私もそう思う」

常識人ですらそう言つてしまつたら、水祁も何もいえなかつた。

【1】

「で・・・打撲だけで生還するというオチか・・・
「うつせえ」

唯一心配していた水祁の頭部に軽くチョップをきます。

「つーか蠍い！…てんめえよくもやつてくれたな？！」

「悪役みたいなセリフだね。いや、演技ってわかつてもけつこいつ
イライラするもんで」

「ああ、一発殴りたい。獅貴は決意を固め、拳を握ったが、それは
羊一に「どうぞ！」とたしなめるように声をかけられたのでひとま
ずおやめた。

「こやあ、よかつたよ。すげかつた、うん」

監督、鶴は絶賛してこるが、こんなはひゅめりゅなドラマで視聴
率かせげるのかと不安に思つ。

「人はスリルを求めてるんだよ。しかもほつとでのこのドラマ限り
の「役者」さん達だ。ド根づく素人なの。メディアも注目するだろ
うよ」

なるほど、それを狙いなのか・・とその場にいた1~2星座ならず
まわりのスタッフや係員も納得する。鶴はたしかに有名監督だが、
その有名は作品のよきのほかに本番中でストーリーの変更をしてし
まうといつ監督にはあつてはならぬことを多々行つとして有名で
もあつた。

「とにかくお疲れ～～これで終わりだよ

出演者をやつてくれた獅貴以外の者達には手の中に飴玉を渡す。

「お~お~、報酬は飴玉ですか？鶴さん」

Hキストラだったからまあいにいけど、と笑う羊一と、「お前等に

はな」と鶴は笑った。

「Hキスアラには飴玉だ。でもそのお三方にはギャラもちゃんと支払うぞ」

そういうて笑みを残し。去つていく。
去つていつた後で、弓吉は微笑んだ。

「これさあ、たしか一粒千円の飴玉だよ」
「マジ?！」
「・・・・悪い、俺桃味食えないんだ」
「じゃあ俺と交換する?」ナ兄
「一粒千円・・・それはどのくらいの価値だろつか?」
「ガチャガチャが10回できるねえ」

「・・・・お前等、貧乏人だな」
ぽつりといつた獅子座に

「そういうあなたは金銭感覚が少々狂ってるようですね

ずっと放置プレイを受けていた乙女座が鬱憤を晴らすべく五寸釘とかなづちを用意していた。

「呪うの？！俺を？！」

「いいオチじゃないですか、あなたが呪われて終了です」

「嫌だよー！だらだら長く書き渡つて結局俺がやられ損？！？」

「はは、まあいい声でせいぜい絶叫してくださいよ、百獸の王でしょ？」

獅子の咆哮とこつちの叫び声は高く、大きく、遠く、彼方に。

続（4終）（後書き）

ほんとじぐたぐたですみません（土下座）

4話は「」で終わります。次回は5話にてー。

5話 蟹座と双子座と「セン」の巻き

転入生。

一見きいたらなんか嬉しい響き。

「うちのクラスに転入生？！女かな？男かな・・・？」

期待を孕ませ担任の合図によつて入つてきた新しいクラスメイトを見て、大抵はすぐに熱氣は冷める。なぜなら人は過剰な期待をしそうるからである。それか、想像と異なつてすぐに現実を見た、という場合かもしれない。

だが、双汰は少し違う。

苛立ち。転入してきたクラスメイトに怒りを感じていた。

「・・そのメガネ、伊達か？似合わねーぜ？」

「初対面の奴にそんなこと言われたくないんですけど」

長い黒髪に、黒い帽子を被つた、男とも女とも分からぬ転入生が。

5話 黒くて喋らないキミ

どうやら性別は「女」らしい。

言葉遣いが少し男らしいのは、この国の言葉を覚えるとき、側にいた人が男であつたからだといつ。

「気が合いそうな人だ。私は好きだな」

「そうか？俺は苦手だ」

メガネのことを言わるのは昔つから嫌っていた双汰。それを初対面の、少女に、笑われたのだ。気分がいいはずがない。

「そりかつかするな、双汰・・・」

蟹カイが宥めれば、双汰も納得いかずとも怒りは冷めてくる。

「すごいな、幼馴染パワー」

「うおっ！で、てめ、こっちくんじゃねえよ」

にゅっと顔を出してきた黒の少女に過剰反応する双汰。名前は・・なんといったか。

「小さい男だな。ボクの周りの男達とは全然違う」

どこか誇らしげに言う少女の笑顔は、双汰には嘲笑いに見え、蟹には嬉しそうに見えた。

「すまない、名前はなんだつたかな」

「・・・センと呼んでくれ。ボクの「愛称」みたいなものだから」

にこ、と笑う少女、「セン」はやはり少女だ。口調のせいで中性的にも見えるがやはり仕草は全て女性らしい。もしかしたら蟹よりも女っぽいかもしれない。

・・だが、どう見ても同じ年には見えないほどその少女は幼く見えた。身長は蟹より少し低く、身体の線が細いため大人っぽく見えるのだが。

「ボクは、なんと呼べばいい？」

「蟹でいいよ」

珍しくフレンドリーな蟹の態度にも双汰はなんだかイライラしていた。長年愛用していた物を、他人に勝手に使われたような気分。恋慕はないが、（あつたとしても蠍王にばれたときが怖い）親友以上恋人以下の関係だ。大切で、他人の中で一番信頼できる相手。

「なんだメガネ、嫉妬か？」^{ジョラシ}

「そうだよ悪いか」「ラ」

「すまない。口は悪いけど双汰はいい奴だから」

蟹のフォローに、センは小さく笑う。

「I know.」

ちらりとみえた白い八重歯。

笑い方は子供っぽくて、誰かを連想させた。

「お前、どつかで会つたことないか？」

「なんだメガネ。古いナンパの仕方の練習か」

真顔で尋ねてきた少女の頭に鉄拳を落とし、「違エよ」と冷たく言い放つ双汰。

「・・・It is a joke.」

痛みに耐えながらセンはそつ言ひ。

「・・・なるほど、やはり違うのか・・」

そして、ぼそりと言った。

「ん? 何か言ったか、お前」

「ああ、言つた」

雰囲気的に隠せ。

だが隠さず頷いたセンに蟹が首を傾げる。

「なんて?」

「違つ」と。ボクはあんた達の間にある関係性を頼まれて調べにきたんだ。まあ年齢を偽つて转入してきたということだな

よく喋るな。そう思つたが、同時に耳を疑つ」とも言つていたような気がする。

「今なんて・・・?」

「だから、ボクは蟹とメガネが本当に親友なのか調べにきたんだ。カマかけてみたりな。それで友といつひとは立証された。いや、こんな姿をさらしてしまつたがまいい」

何を言つて居るのかわからぬ。

「・・・どうこうことだ? 誰にそんなことを?」

「カツミヒシグヒミナギだな。ボクの元保護者と現保護者と契約者からだ。あんた達の保護者でもあるしな」

センの話によると、その男同士は偶然喫茶店で鉢合ひ、「あの2

人は親友かな?」という議題にあがつたというわけだ。

『まあ幼馴染で腐れ縁・・・ずっと一緒にいますね』

志牛がもつともなことを語り、水祁もつねずく。

『では友だらひへ。』

その言葉に、蠍王があははと渴いた笑いを上げる。田は笑つてい
ない。

『びつでもこいけどそれそろ俺、双汰が田障りになつてきただよ
ね』

本氣だ。いくら子供であるうと容赦はしないらしい。
だが無論、保護者が黙つてはいなかつた。

水祁は立ち上がり、ぞわんとこつもは無感情な田に殺氣を灯す。

『家族に手を出してみる。俺が全力をもつて潰す。』

『上等じやねHか。今やつてもこいんだぜ?』

蠍王も禍々しく口角を歪め、立ち上がった。

『・・受けてたつ』

売り言葉に買ひ言葉。

まさに毎間ののんびりとした喫茶店が地獄絵図としてかそつてみ
たとき。

『おやめなせー』

優しいのにどこか低い声と共に2人のこめかみに、フォークの持ち手の部分の先端でブツ指す。

卷之二

と鈍い音と激痛。
大の男2人はその場でこめかみをおさえてうずくまつた。

志牛

『落ち着きが足りませんよ。・・・・・黙んねーなら今度は尖ったほうでやるぞ?』

笑っていない目に「本気だ！！」と確信した2人は膨れながらも黙つた。

『ふふ、では一件落着したしたといひで、「キッヂ」。調べてきて
くれませんか?』

• • • •
• • • •
• • • •
• • • •
• • • •
• • • •
• • • •
• • • •

! ! !

双汰がまるでちやぶ台をひっくり返すが如く勢いよく机を飛ばす。

見事だな、と蟹がぱちぱちと拍手を送つた。

ちなみに飛んでった机は運悪くクラスの委員長にぶつかった。す

ぐに救急車で運ばれ、クラスメイト達はみんな「・・・風です」と目を逸らして証言するのはまたその後のこと。

ともかく双汰はセンの肩を掴み、もつとも気になるとこを尋ねた。

「お前、山羊座か?...」

「Yes.」

「なんでフードると英語が流暢になるんだよー。ついか女だったのか、お前!...」

「うううとセン・・いやキッドは笑み、ネコ!!!型の黒帽子を被る。そうすれば、少し面影が見えてきた。フードから流れそうな黒髪の絶妙さは、たしかにキッド。

「なんつーかよオ、シグはボクを学校にも入れたかったらしいから、一石二鳥じゃね?」

へらへらと笑う少女を改めてみると・・やはり子供。当たり前だ。まだ13歳、中学生なのだから。

「・・・やうござんばさあ、その口調は誰のもん?周りの人ってことは志牛さん・・・はねえから弟の鷺さんか鶴さん?」

「いや、シグだ。ボクは5年間シグと暮らしている。その前まではカツミのところに預けられていた」

その言葉に、蟹と双汰は目を見開いた。

あの温厚な志牛が、こんな喋り方だったとは・・想像がつかない。

「ふふ・・・帰つたらシグにいっぱいなでなでしてもいいんだ

「…………」

『…………』

「つかつかとテンションがあがるキッド」「はあと一人は溜息をつく。

「ペットに成り下がつてゐな……」

「うふ・・・」

他星座の「コマ

射手座 牡羊座 魚座

「ど、ち、ら、こ、し、よ、う、か、な・・・」

「お、なんかなついフレーズじやん、弓箭ゆみのい」

「あ、羊一・・・。いま氷魚ひおちゃんと選択中なんだ

『そうなんです』

「へえ、なんの?この2つの箱の中に何か入つてゐわけ?」

『そうです。羊一ちゃんの「ヘッドホン」とコウモリの羽が入つています』

「怖ええよ!ー!ーか俺のヘッドホン?ー!どおりで昨日からないと

!…!」

「羊一ちゃん五月蠅い。俺たちコウモリの羽粗つてゐんだからやれ

『一世一代の賭けです。部外者はお下がりを
「んじゃあ返せ!! オマケなら俺の私物返せよーーー。』

5話 蟹座と双子座と「ヤン」の巻き（後書き）

何故か力がはいつてるとこには回想部分。
どうも女の子キャラを可愛く書けない。だれかコツを

次回もまた宜しくお願ひします。

6話「君に歌を贈りたい」

乙女座の巻き(一)(前書き)

新しい話になりました。

6話「君に歌を贈りたい」

乙女座の巻き(1)

「琴の音色?」

蟹^{カイ}はいぶかしげに首を傾げたが、氷魚^{ひお}はいつもの無表情はなく、じくじくと力いっぱい頷いた。

琴の音色。現在噂になつてゐる「行方不明事件」の話しだ。

7話 君に歌を贈りたい 序編

最近多発している行方不明事件。

被害者は全て女に限り、数日したら記憶をなくして帰つてくるといふなんとも不思議な事件。なんでも事件前は美しい琴の音色が流れるらしい。

被害者の女性はストレスが解消していたり、肌が綺麗になつて帰つてくるといふ。芸術感覚もアップしていて、ある鬼嫁の若い主婦は清楚な妻と変貌をとげたらしい。

「琴の音色にさらわれたい」などと嘆く女性もいるといつ。

「……それっていいことじやないか

『女のできだよ』

ムカパン、と怒る幼い少女に、蟹は微苦笑した。

「さうだよ、君がさらわれて戻つてくる確証がどこからくるっ…」

「…蠍^{かづみ}王、いつからそこに」

「」はビギングなのでいついてもおかしくないが、まったく気配がなかつた。

蠍王は蟹の隣のイスへと腰を下ろし、ふ、と笑う。

「まあとにかく戻つてくるといつ確証があつたとしても2日3日もないないとなると……俺は、俺は一体何を我慢すればいいんだ？！」

！

「知らん」

胸の動悸をおさえるよつてに呻く男に、蟹は若干引く。

「」の男とはまだたつたの2年ほど付き合つた。12星座の中ではまだまだ浅い方にある。

「・・・蠍王・・少しこ妻のといひに行つてへる」

「ああ、うん。氣をつけて」

すこし残念そうに目を伏せながらも、蠍王は笑つて見送つてくれた。

【一】

「こいつしゃい、蟹わん、氷魚ちゃん」

あでやかな笑顔で迎えてくれたのはこ妻。

蟹は「どうも」と笑い返し、氷魚の手をひきながら家へとお邪魔

した。

すでにキッドも到着していて、これで全員そろつたといふことになる。

「これで全員だな」

室内でもネーム牌をかぶつたキッドが言ひ。

「そうですね。しかし・・12星座の女の子がたつた4人なんて少なすぎますよねえ」

『たしかに』男8人とか多すぎだら。ふざーけんなつ』
「ひーちゃん、だんだん蠍王に似て口悪くなつてきたね」

そう、12星座の中で女性なのはこの4人だけだ。

華は多いほうが多いが何故かまわりは男の方が多いのだ。

「まあたしかに星座の起源である」先祖様たちも男の人が多いですしお。

『むう・・ふじうへい・・』

そんなこんなで女子水入らずの談話をしていたとき、ふと、キッドが言つた。

「そりいえばこの頃、「女神」と「星座」限定の行方不明事件が多発してゐるつてな。今少し前の含めて被害は10人超えしたとか」

「・・「女神」と「星座」・・限定?それは初耳だな」

蟹が驚いて氷魚を見つめると、彼女もこくりと頷く。

「ああ。女神は4人被害にあつてゐる。しかもその女神は大物ばつか

だぜ？

「ギリシア出身」の女神では戦の女神としてしらされている6代目
の「アテナ」。

「ケルト出身」の女神では月の女神である8代目「アリアンロッ
ド」。

「インド出身」の女神では学問の神の5代目「サラスバティー」。
・弁財天だな。

「メソポタニア出身」は豊穣の女神の10代目「イシュタル」だ。

「

出身は起源である「神々」の神話のことだ。
ちなみに女神は怖い女性が多いのだ。

「・・・それはすごい・・・ビッグばっかりだ」
「全員、名のある有名な女神ですね。インターネットで調べればほ
んと出てくるような人達ばっかですね」

現代化とは素晴らしいが夢がなくなる。

『つーか犯人見つかったらハツ裂きにされるんじゃね？』
「言葉遣いが悪いぞ、ひーちゃん」

そういうながら、蟹もその意見には頷けた。

「アテナ」は戦の女神。美しいがその気性は荒く、激しく、プラ
イドが高い。そして彼女の父親である「大神」^{ゼウス}の反応もどうなるだ
ろうか。

「^{サラスバティー}弁財天」にいたっては彼女が、というより夫であり三神一体の
うちの1人「^{プラフマー}梵天」が激怒するであろう。何せ妻に引かれるぐらい
彼女にベタ惚れなのである。

「まあ自業自得ですよね」

そういうて紅茶を啜る乙妻もすこし酷い氣がする。が、世界は甘くないのだ。

「でも、「神」はややこしいな。「初代」が婚姻していたら次代もその子孫にあたる者と結婚しなければならない」

神の間の婚姻は愛が無い場合が多い。
何故血が途絶えないのかが不思議なくらい、よくできた構造になつているのだ。

「そう考えると「星座」にも似たような状況がありますよ?特に「神々・英雄」が機嫌とされる星座は。例を挙げるのなら「ペルセウス座」と「アンドロメダ座」ですね。あの2人の「初代」は婚姻しますから。でも「動物」星座や「神器・呪具」の星座ではありますね」「

動物星座は12星座の割合の中では一番多い。(牡羊座・牡牛座・蟹座・獅子座・蠍座・山羊座・魚座)

神器・呪具星座は天秤座・水瓶座(どちらも神器)

そして神々・英雄星座は双子座・乙女座となる。

「ん・・・?なら乙妻もそうなのか?」

その場の空気が、凍つたような気がした。
1人の女性によつて。

他の星座の1コマ

IN 天秤座 双子座 水瓶座

「（チリンチリン）あ、双汰邪魔邪魔！」

「へ？ぐえつ！！（自転車に轢かれた）」

「・・だから言つたのに（乗つかつたまま）」

「痛い！どけ！水祁兄^{ミナギ}_{にい}～～～！」

「・・・どいてやれ、天^{そら}」

「へいへーい」

「天^{そら}、双汰^{そうた}。そこが行きたいところはあるか？」

『銭湯！』

「・・わかつた、行こうか」

6話「君に歌を贈りたい」　乙女座の巻き(1)（後書き）

久々の更新です。亀更新で申し訳ありません；
12人も登場人物がいて相変わらず意味不明です。

続 ニ女座の巻き（2）

「え？」

「・・・」

キッドの疑問に、蟹は首をかしげ、乙婁は笑顔のまま硬直した。それに気付かず、意外に空気が読めないキッドは続けた。

6話 君に歌を贈りたい 前編

「星座になつた起源に「神々・英雄」が関係していると普通の星座みたいに親から子供への継承伝達はされないだろ？だから乙婁は半分「神族」だ」

またここでやっかいなことに。

そう、星座で「神々・英雄」が起源となつて誕生した星座はたいてい神から生まれる。

乙婁　乙女座は「ギリシア出身」の豊穣の女神「ペルセポネ」であり、数多い「大神」^{セウス}の娘のうちの一人。だから乙婁の母親は豊穣の神である4代目「デメテル」という女神だ。（ペルセポネの母親説は本によつて違ひがあります）

ちなみに神は子供の数を調節できる。でないと血が途切れてしまうからだ。

乙婁の場合は姉妹が上に1人・下に1人いる。姉が5代目「デメテル」の名を継ぎ、自分が「ペルセポネ」とニ女座の名を継ぎ、妹

があぶれた役の「予備」。

あぶれた役、といふのは、例として初代にならって結婚した夫婦がいるとしよう。そうしたら子供達も同じようにするため、また継承された子供同士を結婚させなければならない。

そういうたとき、普通に考えてしまえば兄妹同士での血縁結婚になってしまつ。別に悪くは無いが何度も続けるのはさすがに血が濃くなりすぎて生態系がおかしくなつてしまふのだ。

だからここで「予備」が発生する。

・・非常にわかりにくいシステムだが結果的には大丈夫といふところをわかつてほしい。

「で、だ。」ここからが本題

上記の説明を長々と説明したキッドはコホンと咳払いをする。

「乙婁は今代の「ペルセポネ」。初代ペルセポネはたしか冥界の王、ハデスの奥さんになつた。だから歴代の「ペルセポネ」はみんなそうだ」

ちなみに、それぞれの神話で頂点に立つたり力の強い男性型の神は「初代」から変わることはないといつ。例外として初代が殺されたインド出身の「梵天」^{ブラフマ}や北欧出身の「ロキ」やエジプト出身の「ラー」などらは2代目だが、ほかの主な「神」は初代のままである。

そして例を出すと、ギリシア神話の中ではオリュンポス12神といわれる12人の神のうち、序列3位以内の神「ゼウス」「ハデス」「ポセイドン」は初代から変わらないのだ。

「ふ・・ふふ・・見た目だけ若作りしたようなじじこのところなんか嫁きたくないですよ」

力を込めたせいで、ティーカップが砕けた。すうい握力だな。
まあ結果的にその妻にあたる「ペルセポネ」の名を受け継ぐ者は
ハデスに嫁がなくてはならない症がある。

「え・・じゃあ乙妻、冥王に嫁ぐの?」
「嫁ぎませんよ」

ふいひ、と可愛らしく顔を逸らして乙妻は長い髪を揺らした。

「小さい頃は、仕方ないと思つてたんですよ。

初代の「ペルセポネ」は無理やり妻にされた記録がありますから、
また同じような繰り返しになつたら困るということで、「ペルセポ
ネ」の名を受け継ぐ少女は10も満たないうちに冥界に送られます。
他人と恋をしないように、疑問をもたなによつて

「恋愛の自由もないのかあ・・残酷な政略結婚だな」

考えられない、とでもこいつはキッズは肩を竦め、嫌悪感をあ
らわにする。

「ん? じゃあ何故乙妻はここにいる? その話しが本当なら、冥界に
いるはずだ」

「逃げたに決まってるでしょう? 齢9歳ながらよく逃げ切ったもん
です。・・・・まあ、あいつのおかげなんですねけどね・・
『あいつへ』

氷魚はクッキーを貪り食いながら首をかしげた。口の端からぽろ
ぽろと欠片がこぼれおちているがしつたことではないらしい。

「ええ」

乙婁は少し頬を染めながら頷く。

「私が眞界に入った後、追っかけてきて、私を説得して外の世界に戻してくれた男の子ですよ」

「うお、かつちょっとええな、その人。ん? でもなんでだの? 乙婁さんのが好きだったのか?」

キッドは恋愛話より男の勇士のほひに田をキラキラと輝かせている。彼女らしいといえばらしい。

「いいえ、ただの良心だと思いますよ。アレは馬鹿です。きっと私がかわいそうにおもえたんじゃないですか? 正義感も溢れるヴァ力ですし」

「酷い言いようだ、馬鹿を一回もいつたぞ。一回田は馬鹿ではなくヴァカといった。

「ん・・・? でもやいつの話を聞く限り・・なんかしつてるような・」

「獅貴です」
「まじかアー!」

蟹が疑問を持ち、キッドが叫ぶ。同類に見えて対照的だ。

乙婁は微笑み、氷魚の汚れた口周りをふいてやりながら続きを話した。

「「戻つて来れなくなるんだぞ?」ってす」」形相で言いましてね。

その頃から有名だった獅貴は付き人の人達を見事な演技で騙して私を連れ戻しました。

お陰で私はこうしてここにいますが、獅貴は「ハデス」を敵に回した・・地下神殿に住む神なので会う」とはないとおもいますが、うらまれているでしょうねえ」

「なんつーメロドrama・・
「しようさんあたい
称贊に価しますね」

そういうて菓子を貪る氷魚以外の3人は笑い合つたが、ここでいらぬ介入。

「と、いひことは、あなたが「乙女座」ですか？」

柔らかな、中性的な青年の声。

「やつです・・・よ・・・?」

「ん?」と首をかしげて振り向くと、金色の輪を頭に装着している、栗毛色の髪色の青年が佇んでいた。手には小さな琴がある。

『誰?...』

乙女の部屋に...とは誰も思わないが、不審人物に女性陣は声を上げた。

青年はあわあわとうろたえ、最終的には土下座をするような形で額を床にこすりつける。

「僕の名前はローフH。15代目「オルフェイス」にして「琴座」

の名も継いでいます」

「・・その琴・・もしかして、今までの行方不明事件・・あなたが犯人?」

「そうです」

即答した「犯人」。だが、全員無言だった。
そして、蟹^{カイ}が重く息を吐いた。

「・・ああ・・なんで気付かなかつたんだろう。「琴の音色で人を誘う」って・・そんなことできるの琴座だけだつたね・・」

「歴代の「オルフェイス」は初代と同じく「音楽科兼詩人」だもんなア」

「オルフェイス」はギリシア出身。種族は「人間」であり神に愛された「人間」といつてもいい。

彼が奏でる琴の音色は神も獸も耳を傾け、激しい川の流れさえ止めてしまう威力がある。

しかも今代は美容的にもいいらしい。

『そんな人がいつるちゃんになんの用なの?』

氷魚の問いを見て、ローフェは苦く笑つた。

「・・・・乙女座のあなたにお願いしたい・・」

『ぐりと、ローフェは唾を呑み込み、乙婬を見つめた。

「僕と冥界に行つてください!-」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・え』

続く

他星座の日常

I N 牡牛座 獅子座 蟻座 水瓶座

「まず、わたしは欠番という扱いで。少し書斎整理するので静かにお願いしますね」

「まあ志牛さんとは相性が合わないってってだけで嫌いじゃないしな」

「そうだね。でも君はきらいだよ獅貴君」

「蟻さそりつ・・てめエいきなり！」

「俺は嫌いではない。ただ・・・・・・憎い（ボソッ）」

「水瓶みずがめ・・！それ嫌いよりタチ悪くねえか？！」

「安心しろ。蟻かつみ王には殺意しか感じない」

「俺と同意権だねー」

「だあああっ！やめろよー。日常がメインだぜ？ー」の話しへ…』

『知るか（水瓶座・蠍座）』

「てめえらつ！！（獅子座）」

「つるせHー！静かにしてろつていつただろー！（牡牛座）」

『ビクッ！…スイマセン（水瓶・蠍・獅子）』

「…静かにお願いしますね？（につけりつ）」

続　乙女座の巻を（2）（後書き）

妙な続き方です・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903h/>

12星座の皆様

2010年12月23日14時49分発行